



子どもの認識を科学するとは？

京都教育大学教育学部
黒田 恭史

アウトライン

- (1) 幼保小の架け橋と日本の教育課題
- (2) 横地清の幼児教育の基本理念
- (3) 幼保小架け橋期カリキュラムの提案
- (4) まとめ

【幼保小の架け橋プログラムの実施に関する視点】

- 幼保小の教育のつながりを意識した活動が、子供の豊かな体験を生み出し、主体的・対話的で深い学びの実現につながります
- 施設類型・設置者・学校種を越えて、幼保小の先生が、気軽に話し合える関係を構築し、対話を大切にするとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて協働して取り組み、発信しましょう
- 園・学校等外との連携については、書類上はしっかりとまとめられているが具体的な取組が進まないという批判も聞かれます。実質的な話し合いや実践を重視し、そうした具体的な取組を可視化し関係者で共有するために、わかりやすい書類を作成していくという意識で取り組みましょう
- ICTやオンライン等の活用により、先生の負担軽減や時間の効率的使用も図りつつ、効果的に取り組めるようにしましょう
- 全ての先生が関わるプロセスや、組織的な体制づくりを大切にし、接続に関する取組を年間計画に位置付け、持続的・発展的な取組を目指しましょう
- 形式的な取組とならないよう、家庭や地域も一緒に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、子供の姿を起点に話し合いを深めましょう

2-(1) 現状の課題を踏まえた幼保小の架け橋プログラムのねらい

【幼保小連携の成果と課題】

【成果】

- ・幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3要領・指針の整合性確保
- ・幼保小接続期の連携の手掛かりとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」策定
- ・小学校との連携の取組を行っている園が約9割に上るなど、取組が進展

【課題】

- ・幼稚園・保育所・認定こども園の7～9割が小学校との連携に課題意識、各園・小学校における連携の必要性に関する意識の差
- ・半数以上の園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達目標と誤解され、連携の手掛かりとして十分機能していない
- ・スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」だけでは、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善方法がわからない
- ・小学校側の取組が、教育方法の改善に踏み込まず学校探検等にとどまるケースが多い
- ・施設類型の違いを越えた共通性が見えにくい
- ・教育の質に関するデータに基づき幼児期・接続期の教育の質の保障を図っていくための基盤が弱い

→**接続期の学びや生活の基盤の育成に大きな影響**

【架け橋プログラムのねらい】

- 幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムと小学校1年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進
- 3要領・指針、特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かしていくことができる手立てを普及
- 架け橋期に園の先生が行っている環境の構成や子供への関わり方に関する工夫が見える化し、家庭や地域にも普及
- 幼児期・架け橋期の教育の質保障のための枠組みを構築し、データに基づくカリキュラム・教育方法の改善を促進

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）
（令和5年2月 中央教育審議会初等中等教育分科会
幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会）

不登校児童生徒数の実態

【小学校】 在籍児童数 6,100,280人(-9万6千人)

区分(年度)	不登校児童数(前年度比)
2023年度	<u>130,370人(+24p)</u>
2022年度	105,113人(+29p)
2021年度	81,498人(+29p)
2020年度	63,350人(+19p)

【中学校】 在籍生徒数 3,220,963人(-2万4千人)

区分(年度)	不登校生徒数(前年度比)
2023年度	<u>216,112人(+11p)</u>
2022年度	193,936人(+19p)
2021年度	163,442人(+23p)
2020年度	132,777人(+4p)

(令和5年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」)文部科学省初等中等教育局児童生徒課(令和6年10月)

- 小学生は13万人超, 中学生は21万6千人超
- 小学校では、3年間で2倍以上の不登校児童
- 小学生は約47人に1人、中学生は約15人に1人が不登校
- 小学校では、3クラスに約2人の不登校児童
- 中学校では、1クラスに約2人の不登校生徒

長期欠席児童生徒数の実態

病気、経済的な理由、その他を含む

【小学校】 不登校児童数 130,370人

区分(年度)	長期欠席児童数(前年度比)
2023年度	<u>218,238人(+11p)</u>
2022年度	196,676人(+8p)
2021年度	180,875人(+59p)
2020年度	113,746人(+26p)

【中学校】 不登校生徒数 216,112人

区分(年度)	長期欠席生徒数(前年度比)
2022年度	<u>275,202人(+4p)</u>
2022年度	263,972人(+13p)
2021年度	232,875人(+34p)
2020年度	174,001人(+7p)

(令和5年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」)文部科学省初等中等教育局児童生徒課(令和6年10月)

- 小学生は21万8千人超，中学生は27万5千人超
- 小学校の長期欠席児童数は、不登校児童数の約1.67倍
- 小学生は28人に1人、中学生は12人に1人が長期欠席
- 小学校では、1クラスに約1人の長期欠席児童
- 中学校では、1クラスに約3人の長期欠席生徒

令和6年 栃木県不登校調査概要

■調査概要

不登校対策の充実を一層推進するために、保護者の皆様が、お子さまとの関わりや学校との関わりの中で感じていることや支援ニーズ等について調査を実施した。

- ・ 調査対象：県内の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校に在籍している
欠席の多い児童生徒の保護者
- ・ 調査方法：Web回答
- ・ 調査時期：令和6(2024)年9月4日(水)～9月30日(月)
- ・ 回収数：小学校 155人 中学校 348人 高等学校 1,369人 特別支援学校94人

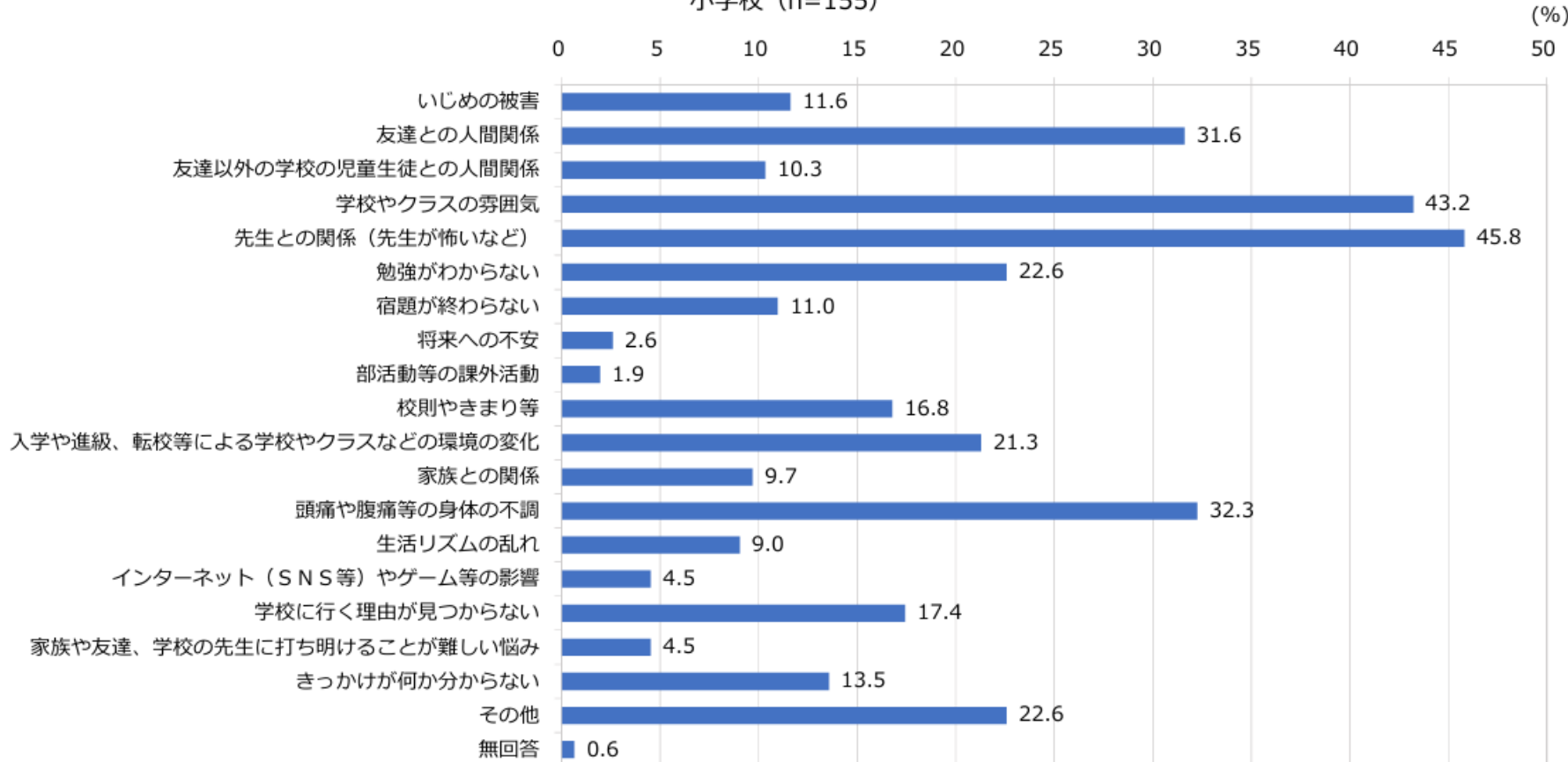
※小学校には義務教育学校（前期課程）を含む。中学校には義務教育学校（後期課程）を含む。

学校を休むようになったきっかけ

2. 子どもが学校を休むようになったきっかけ

子どもが学校を休むようになったきっかけを見ると、小学校では、「先生との関係」の割合が45.8%と最も高く、次いで「学校やクラスの雰囲気（43.2%）」となっている。

子どもが学校を休むようになった（休みがちになっている）きっかけ
小学校（n=155）



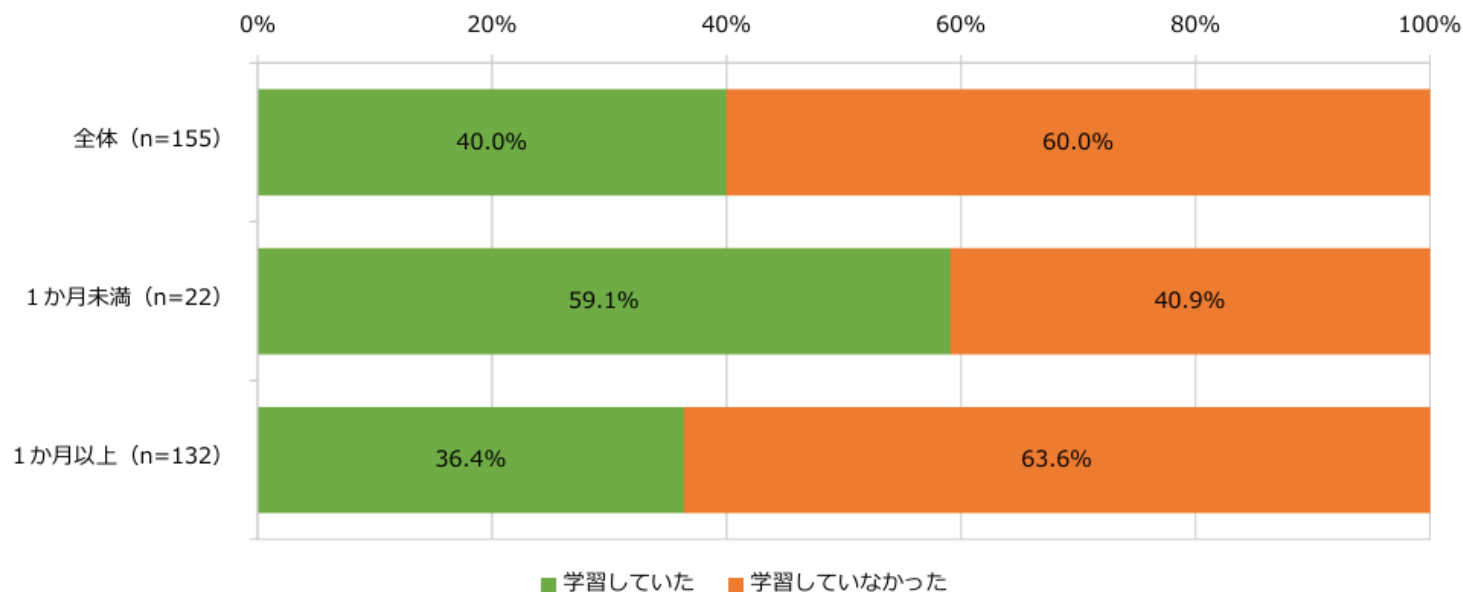
- 先生との関係 45.8%
- クラス雰囲気 43.2%
- 身体不調 32.3%
- 友人関係 31.6%
- 勉強わからない 22.6%

学校を休んでいる間の自宅学習

4. 子どもが学校を休んでいる間の自宅学習の有無

欠席期間別に子どもが学校を休んでいる間の自宅学習についてみると、小学校では、1か月未満では「学習していた」が59.1%だが、1か月以上では36.4%となっている。

子どもが学校を休んでいる間（休みがちになっている時）の自宅学習の有無



- ・ 全体では、約 6 割が学習していない
- ・ 1 か月未満では、約 4 割が学習していない
- ・ 1 か月以上では、6 割以上が学習していない

学年別不登校・長期欠席児童生徒

学校種別		小学校							中学校			
	学年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計	1年生	2年生	3年生	合計
不登校	2021年度	4,534	7,269	10,289	14,712	19,690	25,004	81,498	45,778	58,740	58,924	163,442
	2022年度	6,668	10,047	13,823	18,373	25,430	30,771	105,112	53,770	70,622	69,544	193,936
	2023年度	9,154	13,694	17,997	23,090	29,847	36,588	130,370	58,035	77,768	80,309	216,112
	増加率	137.3%	136.3%	130.2%	125.7%	117.4%	118.9%	124.0%	107.9%	110.1%	115.5%	111.4%

長期欠席	2021年度	17,164	21,081	25,579	31,619	38,284	47,148	180,875	66,203	82,941	83,731	232,875
	2022年度	17,925	22,592	27,397	33,300	42,846	52,616	196,676	73,309	96,066	94,597	263,972
	2023年度	21,523	27,051	31,191	37,237	45,374	55,862	218,238	74,744	98,884	101,574	275,202
	増加率	120.1%	119.7%	113.8%	111.8%	105.9%	106.2%	111.0%	102.0%	102.9%	107.4%	104.3%

前年度から不登校	2021年度	—	2,233	3,704	5,823	8,378	12,013	32,151	12,992	30,784	39,752	83,528
	2022年度	—	3,112	5,091	7,482	10,901	15,063	41,649	16,014	39,176	47,602	102,792
	2023年度	—	4,534	7,263	10,322	14,078	19,726	55,923	20,586	46,900	57,773	125,259
	増加率	—	145.7%	142.7%	138.0%	129.1%	131.0%	134.3%	128.6%	119.7%	121.4%	121.9%

(令和5年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」)文部科学省初等中等教育局児童生徒課(令和6年10月)

- 不登校における、**小学校の全学年での増加率が顕著**
- 小学生は**1、2年生**、中学生は**3年生**の増加率が高い
- 小学校低学年での、**前年度から不登校率の増加が顕著**

アウトライン

(1) 幼保小の架け橋と日本の教育課題

(2) 横地清の幼児教育の基本理念

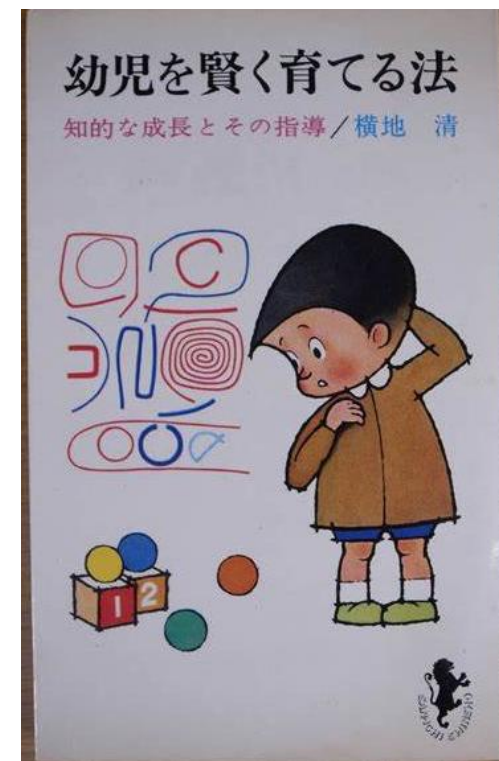
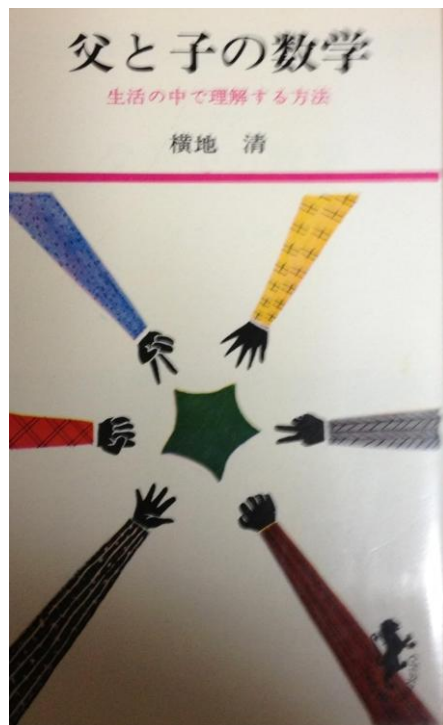
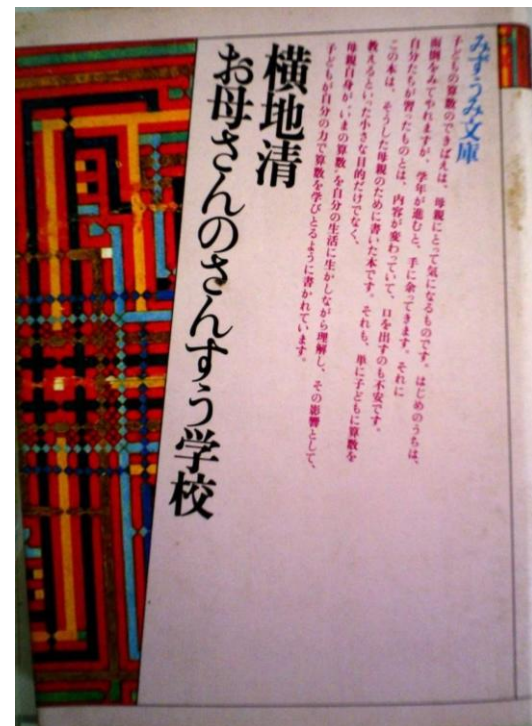
(3) 幼保小架け橋期カリキュラムの提案

(4) まとめ

横地清の幼児教育の基本理念

- 1) 何才で認識できるか、が問題ではなくて、むしろ、**どのような課程で認識**させられるかが重要な私の問題です。
- 2) ①ひとつ，ふたつ，みつつ，と唱えたり数えたりすることに関係する，**数の分野**，②長さ，広さ，かさなどに関係する，**量の分野**，③ものの形や，ものの位置に関係する，**図形と空間の分野**，④行動のきまりや，ものごとの判断に関係する，**論理の分野**
- 3) 子どもは，数の教育が対象とする広い分野について，そこに見られる法則を，**自ら求めて抽象化**しようとしています。

横地清の幼児教育書（保護者向け）



アウトライン

- (1) 幼保小の架け橋と日本の教育課題
- (2) 横地清の幼児教育の基本理念
- (3) 幼保小架け橋期カリキュラムの提案
- (4) まとめ

幼児期の子どものあそび・生活

第2章 机上あそびと数量・図形の学びの芽生え

- 第1節 すごろくと数列
- 第2節 こま回しと円
- 第3節 折紙と図形
- 第4節 積み木と立体図形
- 第5節 お絵描きにおける3次元と2次元
- 第6節 人形作りと比
- 第7節 絵本よみと数・図形

第4章 自然物を使ったあそびと数量・図形の学びの芽生え

- 第1節 植物の成長と長さ・形
- 第2節 種の収穫と数の比較
- 第3節 土の中の収穫と体積
- 第4節 生き物の飼育と形・動き

第3章 身体を使ったあそびと数量・図形の学びの芽生え

- 第1節 かくれんぼと位置関係
- 第2節 砂場と変形
- 第3節 かけっこと速さ
- 第4節 プールと浮力
- 第5節 ジャングルジムと空間図形
- 第6節 シーソーと重さ
- 第7節 じゃんけんと確率

第5章 食事と数量・図形の学びの芽生え

- 第1節 配膳と位置関係
- 第2節 お菓子の分割と分数
- 第3節 スープと温度
- 第4節 食材と図形

3. 小学校算数科への架け橋に向けて

3.1.じゃんけんと確率

じゃんけんは、子どもたちの様々な活動を支えていく上で、なくてはならない活動です。勝ち負けを決めるだけでなく、順番を決める、仲間に分けるなど、集団活動になった場面で、様々な必要とされます。

じゃんけんにひそむ算数的要素には、場合の数や確率などについて理解する活動があります。

6年生では、場合の数について扱います。2人でのじゃんけんを考えると、Aさんが「グー」を出した場合、Bさんは「グー」「チョキ」「パー」の3通りとなります。同様に、Aさんが「チョキ」の場合も3通り、Aさんが「パー」の場合も3通りとなって、全部で9通りとなります。このうち、Aさんが勝つのは、「グー」対「チョキ」、「チョキ」対「パー」、「パー」対「グー」の3通りとなります。同様に、Bさんが勝つのも3通りとなります。残りの3通りは、「グー」対「グー」、「チョキ」対「チョキ」、「パー」対「パー」の引き分けの場合となります。つまり、Aさんが勝つ、Bさんが勝つ、引き分けるがそれぞれ3通りずつとなって、確率はいずれも $1/3$ となるわけです。

3人でのじゃんけんでは、さらに複雑になります。Aさんが出すのが「グー、チョキ、パー」の3通りで、BさんもCさんも同じく3通りなので、全部で $3 \times 3 \times 3 = 27$ 通りとなるわけです。その内、Aさんだけが勝つのは、「グー」対「チョキ」対「チョキ」、「チョキ」対「パー」対「パー」、「パー」対「グー」対「グー」の3通りとなります。同様に、BさんやCさんが勝つのもそれぞれ3通りとなって全部で9通りとなります。次にAさんとBさんが同時に勝つのは、「グー」対「グー」対「チョキ」、「チョキ」対「チョキ」対「パー」、「パー」対「パー」対「グー」の3通りとなります。同様に、BさんとCさん、CさんとAさんが勝つのもそれぞれ3通りとなって全部で9通りとなります。最後に、引き分けは3人が同じものを出す場合の3通りと、3人がそれぞれ違うものを出す6通りとなって全部で9通りとなります。とても複雑ですが、ここでも3人が公平な関係になっているわけです。

3.2.じゃんけんと小学校算数科との架け橋

じゃんけんは、教科の学習というよりも、むしろ生活や遊びの一場面に必要なツールといえますが、算数科においては、「場合の数」や「確率（実際には中学校数学）」の学習に関連するものといえます。

そのため、幼児期段階のじゃんけんの活動では、次のような点に留意することが大切です。

まずは、2人でのじゃんけんに慣れさせます。じゃんけんによって勝ち、負け、引き分けの3種類があり、それぞれ等確率（不公平はない）であることを体験から感じさせることです。私は「グー」が好きだからということによって、「グー」が勝つ場合が多い（確率が高い）といったことが起こるわけではないように、少しずつ感情と確率をわけて考えることができるようにすることが大切です。

次に、3人のじゃんけんに慣れさせます。2人の場合と違って、勝つ場合においても、1人だけが勝つと、2人が勝つの2通りがあります。また引き分けの場合においても、3人が同じ「グー」と、3人が「グー」「チョキ」「パー」の2通りがあります。このように、非常に複雑な関係性を理解するとともに、その中にあっても、それぞれ等確率（不公平はない）であることを体験から感じさせることです。

最後に、多くの子どもでのじゃんけんに慣れさせます。例えば10人の中から1番目にくじを引く子どもを決める場面を設定します。この場合、10人で一度にじゃんけんをすると、引き分けが続いてなかなか決まりません。そこで、2つのグループに分かれてじゃんけんをするといったことを行いますが、この場合も、できるだけ同じ人数に分かれるようにします。すなわち、5人と5人に分かれてじゃんけんをすることが、公平であることに気付かせます。これを、8人と2人に分けてしまうと、8人の方ではその中で1番になるのが $1/8$ で、2人の方では $1/2$ となって、確率が不公平になってしまいますので、こうしたことへの意識も経験を通して捉えさせていくことができればと思います。

子どものあそび・生活から
学びの芽生えを探る

ピーちゃん先生
おそびdeさんすう

すごろく

京都教育大学 教授 黒田恭史



アウトライン

- (1) 幼保小の架け橋と日本の教育課題
- (2) 横地清の幼児教育の基本理念
- (3) 幼保小架け橋期カリキュラムの提案
- (4) まとめ

まとめ

- 1) 幼保小の連携は、研究者、文部科学省ともに重視しているが、その歩みは始まったばかりであり、**各教員間の情報共有も途上**である。
- 2) 横地清の、乳幼児期から初等教育期までを**人間の連続と脱皮による認識の変容・成長**として捉える視点は、先進的な知見を与えるものである。
- 3) **幼児の遊び・生活から算数教育への接続の具体化**に向けた各種教材化が進められており、**子どもの認識を科学することは**、日本の教育課題（不登校等）の解決を考える上でも重要な取り組みである。